

石川漢詩（二）

平成二十六年九月 上架

養病雜詩三首

○平成十四年三月二十四日作

其一

管先小鏡入中腸

管先の小鏡中腸に入り

照出膏盲二豎藏

照らし出だす膏盲二豎の藏るるを

老叟奚疑天所命

老叟らうそう奚なをか疑はん天の命ずる所

執刀白面小周郎

執刀は白面の小周郎

陽

膏盲の句 〓 晉公病を得、名醫を召す。来る前に夢見るあり、童子二人、相語りて曰く、「盲の上、

膏の下（胸部の奥）に隠れたれば、名醫たりとも如何ともするなし」と。二豎は「二人の童子」の謂ひなり。

老叟奚疑天所命 〓 老叟は老人の意にして、自ら（作者）を指す。我、天の命ずる所、如何ならんとも従容として従はん。覺悟の程を示したり。

小周郎 〓 若き周瑜。吳の孫權に仕へて、赤壁に曹操を破るに功あり。美男にて知らる。執刀の醫師、白皙の美青年たるを言へるなり。

其 二

身體元知不可傷

身體元知る傷るべからざるを

老生所願百年長

老生願ふ所は百年の長きを

白衣少女厲聲急

白衣の少女厲聲急に

教我術前呼吸方

我に教ふ術前の呼吸方

陽

不可傷 〓 「孝經」に「身體髮膚、之を父母に受く、敢へて毀傷せざるは孝の始めなり」とあり。

病に臥し、あるいは負傷すること勿れと日頃自戒するあり。

老生 〓 老いたる己をいふ。

百年 〓 壽命の謂ひ。「古詩十九首」其十五に「生年百に滿たず」とあり。

厲聲 〓 勵まさんとの聲なり。

其 三

劃出禍根身體輕

禍根を劃出して身體輕し

牀頭毎夜熟眠清

牀頭毎夜熟眠清し

内人笑道有餘惠

内人笑つて道ふ 餘惠有り

頃日不曾聞鼾聲

頃日曾て鼾聲を聞かずと

(庚)

劃出 || 劃は「斷ち切る」の意。

患部を切りて、外へ出したるなり。

牀頭 || ベッド。頭は接尾語。

内人 || 家内。自らの妻。

頃日 || 近ごろ。

鼾聲 || いびき

